

[平成15年度特別奨励研究報告]

## 博物館(ミュージアム)における 展示環境の位置づけとその運営について

角 谷 修

### はじめに

全国に登録博物館及び登録相当博物館さらに類似の施設を合わせると約5000館以上存在している。関連の施設も合わせるとそれ以上の数となり、また網羅している領域は歴史、民俗、人文科学、自然科学、美術・芸術等に渡り、我々が生存して生活するほぼすべてに広がっていると思われる。このように考えてみると普段は当たり前のように存在するこれらの施設がどれほどの役割を担っているか想像してみる必要がある。

数年前より独立法人化の一環で国立の施設がその制度により改革を行い、新しい船出を始めている。今後公立の施設もこの流れに沿って変革を実施することになると思われ、施設の存続をも念頭に入れてその改革を見守ることが今後の文化行政にとって非常に重要な時期と考えるべきである。このことを受けて施設の効率的な運営及び本格的な改善を計画することになるはずである。これまで筆者が取材や調査を踏まえた上で、広範囲に渡る専門領域の中よりもっとも人々の目に触れ、印象的に影響を与える展示環境、デザイン領域を中心に報告と提言を試みたい。

### 博物館(ミュージアム)の成り立ちと展示環境の関わりについて

博物館の原点は、紀元前3世紀にまで遡ることが出来るほど人類との関わりが深い。当初は、学問の研究機関や教会及び修道院を主体とした宗教の布教としての機能が中心であった。研究のための資料として戦利品が集められ、布教の教材として聖典や写本等のコレクションが盛んに行われていた。これら

の展示品は、当然一般の人々には非公開であり存在すら知らされていなかったのではないかと思われる。16世紀ごろより大航海時代を経て急激に世界が広がりを見せ、その影響下様々の珍品、貴金属、その他が当時の権力者や王侯貴族にわたって自邸の一部に陳列室、宝物室が出現した。これらのコレクションは初めは身内での楽しむ程度であったが、しだいに公開されるようになり市民社会の成立の動きとともに一般の人々の目にもふれるようになっていく。我国の博物館の起原も同じように権力や宗教による関係が深く、代表的な事例として東大寺の寺宝や正倉院に象徴される寺社の境内に建造された宝物館での教典や絵画、彫刻、楽器などのコレクションが上げられる。これらの収蔵品は、宗教に則した行事や祭りの一定の時期に公開されるようになる。

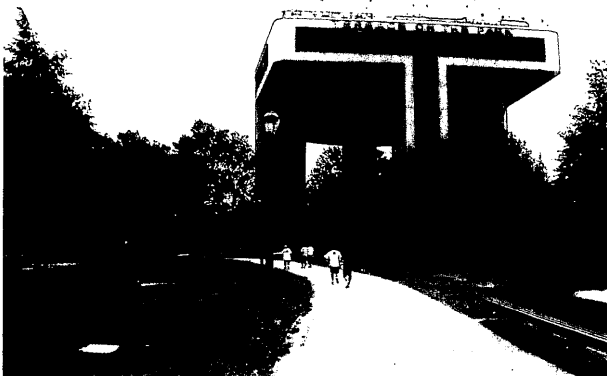
これらの流れとは別次元で、近代になり産業革命がヨーロッパで広がりを見せる中で博覧会のシステムが形作られてくる。初期のころは個人のコレクションの品評会が前身であり、その輪が広がり始めて産業や文化に関わる製品及び情報が主体として催しが開催されるようになる。18世紀後半のロンドン勸業博覧会やパリ工業博覧会<sup>1</sup>などに発展して、1851年に世界初の万国博覧会がロンドンのハイドパークにて開催されることとなる。その後世界の主要な国々で開催され、博覧会が原動力となって技術開発や商業、文化の発展に大きく寄与することになる。

その象徴としてロンドンに建造された水晶宮(クリスタルパレス)やパリで社会問題となったエッフェル塔の建造などその後の技術開発に留まらず、都市づくりの根幹をもゆるがす現象となっていく。また人々の欲求の中にも博覧会は大きく影響してお

り、半年程度の期間で開催される非日常空間での印象や経験は、当時とすれば比較するものがない程のイメージを植え付けたと思われる。このことは日常にもこのような華やかで、人々の欲求に答えられるような空間、システムを望むこととなる。これが現在の百貨店でありその施設の中に非日常を思わせる大空間(アトリウム)を作り出し、人々の欲求を満たすような様々な商品とサービスを対面式及び値札方式を取り入れて完成させていく。また博覧会での国際的で膨大な展示物のこれまでにない見せ方(ショーウィンドウ、ジオラマ<sup>2</sup>など)に多大な影響を受けて、植物園や動物園を含む博物館などの文化的な施設が変貌していった。

我国も19世紀後半に京都博覧会<sup>3</sup>を開催して、その後内国勧業博覧会<sup>4</sup>を継続する中で伝統的な呉服店が百貨店に変貌を遂げ、博覧会の跡地に公園整備や国立博物館、美術館、動物園を設立することで急激に欧米の方式を取り入れながら全国に波及していく。その後大正時代に入り、人々の生活水準(ホワイトカラーの台頭)の上昇と安定により消費文化がしだいに確立されつつある時期に百貨店を中心とする販売システムやその展示環境が急速に発展した。また並行して博覧会を頂点とする仮設のイベント関連及び娯楽施設の台頭もこれらの展示関連の発展に大いに貢献した。その後時代は混沌となり一時停滞するが、戦後それまで経済状況から取り残されていた博物館、美術館関連の施設にも大きな変化が訪れ

る。これまでほとんど変えることがなかった展示品や収蔵資料の保存を中心とした運営方針を1960年を境に一般への公開を柱に置くようになってくる。この現象の背景には、この時期に県立、市立の地域博物館が一斉に設立され急激に施設の数が増加したことが上げられる。またこのころより企画展を企画、運営する施設が出て来るようになり、学芸員の活動に幅が求められると共に展示への参加が望まれるようになる。具体的には壁面の作り付けのハイケースと可動式のローケースが中心の展示が当初行われていたが、次第に利用者の目線で展示方法を試みるようになりジオラマやレプリカを使用するようになる。展示環境に留まらず建築及び外部環境に至るまで大きく進展する機会となる大阪万国博が1970年に開催されて、これまでの博覧会の歴史を振り返るようになり人々に展示資料を見せる行為は、非常に多様で多岐に亘り、なおかつ魅了することに繋がったと思われる。このことを証明するようにこれまでの博覧会の歴史の中でもっとも入場者(6422万人)を集めることに成功すると共に跡地利用で当時にすれば実験的な施設(国立民族学博物館)の開設にこぎ着ける。この施設は博覧会で得た経験と実績をもとに建築及び展示環境を企画することに成功しており、中でも展示のシステム(グリッド展示の展開)の構築とそれまでのジオラマ、レプリカのレベルと精度を越えた見せ方を実施している。これにより展示環境の大幅な進展とジオラマ等で問われる造形物の精度が格段にレベルを上げる。また見る側の視点に立った参加型展示の取り組みや情報機器の可能性を追求する始まりとなり、その後の展示の考え方に展示品を軸とする「もの」中心のこれまでの手法から展示資料の背景やその周辺の「こと」を表現する手法で、より観客に理解を促すように変化していく。現在はそれらの手法がより高度に成長して映像による展開や舞台を想定するような演出を組み立てて、実物よりリアルな展示環境を作り上げる試みとなっている。また情報機器の導入の比率が大きくなるだけに留まらず、その機器の精度や運営の手法が展示の完成度に大きく影響していく。



ニューヨーククイーンズ地区フラッシングメドウパーク内博覧会会場跡地(1964/65)

ここまでの経過が博物館や博覧会等とともに発展した展示の流れを示しているが、ここからは博物館内部での展示の位置づけとその役割について整理をしたい。我国の博物館内部に展示を企画、設計する部門もしくは人材が存在しているかと言うと正確な資料は取っていないが、一部の国立の博物館もしくは私立の施設にのみで活動している程度である。要するに実態としてほとんど専属の専門家を育成し、またその活動を支える基盤や研究がなされていないのが現状である。それではこれまで博物館等での展示企画や設計、施工また運営はどのように進められていたのだろうか。その道筋はいくつか存在するが、もっとも多い事例は外部の専門企業に依頼する方法である。戦前までは昭和26年に制定される博物館法も無く、また来館者を想定した陳列、展示手法はほとんどとっておらず、保存収蔵を基本としていたと思われる。よって専門企業に依頼する必要はなかったが、戦後博物館法の制定を転機に一般公開を前提とした施設の建設及び展示デザインへの欲求が起こって来ることとなる。その欲求に答えたのが我国独自の発展を遂げていた展示業界の企業で、人々に見せるための展示を中心に空間を構成するようにならなくなっていった。当時の展示は建築の完了した後もしくは既存の建築の内部空間についてほとんど変更が出来ず、よって可動式のケースや間仕切り壁面パネル、グラフィックパネル（解説パネルなど）によりイメージづけられていた。その後公立博物館（県立、市立など）の建設が盛んになる昭和40年代前後より建築が無窓式となり、これまでの展示物を単に見せて解説するのみでは無く展示物を中心にその背景や意味付けを造形物、演出照明、映像などを使用して表現するようになる。これにより展示全般にテーマ及び方向性を設定出来るようになり、飛躍的に展示環境が進歩したのに加え全国に新しいタイプの観光施設として受入られて急激に数を増やして行く。しかし展示環境が発展するのと裏腹にその施設を維持管理及び運営する側の関与が減少するようになる。この原因として考えられるのは展示業界の積極的な展示に対しての提案やその裏付けとしての技

術力への信頼感と依存度の大きさがあると思われるが、それより施設を運営する側の展示に対する認識に起因していると思われる。

## 展示の意義と海外取材(ニューヨーク滞在等)

本来博物館の展示は、その施設の研究成果をもっとも表現している方法であり、さらにその評価がその施設の実績につながるものであると確信する。またこの展示を管理運営することで入館者の反応やその後のリニューアルへの指針を作ることが可能であるはずで、これだけ観覧者とのつながりを計れる手段は存在しないと考える。ここで展示の意義を改めて整理すると次のように考えられるのではないか、前提として展示デザイン・設計を行う人材は館に所属するものとする。

- 館の収蔵品などをもとにその研究実績を担当する学芸員と組んで展示概要（展示プランニング）を組み立てる。
- プランニングを基本として展示品の見せ方を検討するが、あくまで利用者の視点に立って計画を進める。
- 計画した展示をさらに効果的に表現するために照明計画やショーケースなどの什器の設計、解説を加えたグラフィック及びジオラマやレプリカの計画をまとめる。
- 収蔵品や展示物の演示具（サポート器具）を学芸員とともに検討、設計する。またサンプルを作成して安全を確認する。
- 建築との取り合いを考慮して計画を進めることが必要だが、既存の建物の場合は限定されるので設備や構造との関連に留意する。
- 以上の事項を総合的に組み立てて、導線計画や配置計画を行い、実際の展示設計を進める。
- 設計と同時並行で予算計画を推進して、適切な工法や材料、製品を選択する。また工事工程も念頭において内容を詰めていく。
- 工事施工を前提とした現場での採寸や原寸モデルでのシミュレーションを出来る限り実施する。ま

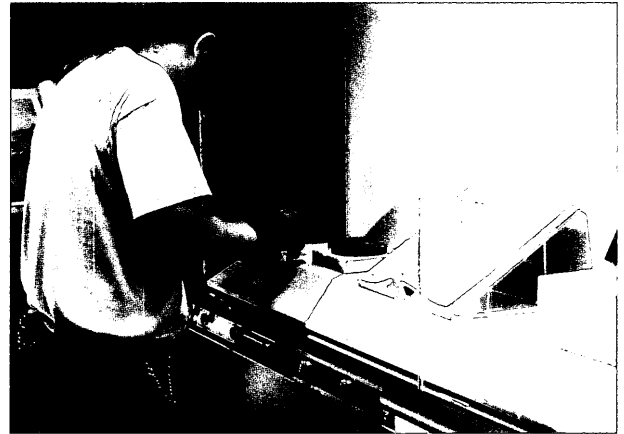
た工事中での立ち会いによる微調整を行う。

- 展示工事が終了後の収蔵品の陳列作業において最終のバランス、取り付けの調整を行う。さらに照明の位置や照度についてもチェックを実施する。
- 展示環境が完了後は、来館者の反応やサポートするスタッフの意見を参考に改良を加えるとともに次回のテーマや企画展のヒントを得る。

以上のように博物館にとって貴重な情報を収集する場面は数多くあると思われる。たとえば収蔵品を展示する折の見せ方やその情報の表現方法など、また演示具によるもっとも効果的な陳列の仕方、さらに技術的なこと以外の来館者からの意見を集約することなどがあげられる。

このことをさらに認識することとなったニューヨークでの取材の場面を紹介したい。一つ目はメトロポリタン美術館の東洋部での企画展の経過である。基本的な展示環境の推進方法は、担当キュレーターの依頼により総務・管理内に置かれているデザイン部より展示設計の専門家とグラフィックデザインの専門家が対応する。展示担当は、導入部での表現と展示品を中心とするレイアウトとケース什器の設計を行う。またライティングについても担当するが、部内に専門家も在籍している。グラフィック担当は、屋外正面エントランスに掲げられる大型のパナー(大型懸垂幕広告)と展示グラフィックパネル、キャプションなどの解説カード、レセプション用のDM(ダイレクトメール)さらに報道関係への資料作成を行う。この他に重要な項目として、展示環境のイメージに大きく影響を与える壁面などの色彩ペイントを実施する部門。造作を行うカーペンターや展示ケースを製作する部門などが主に関わることとなる。さらに設計、製作以外の展示品を支えるもしくは安定させる補助を行う演示具の設計、試作を担当するオブジェクトコンサバターや展示品の移動を行うリガーズ、実際に展示品に触れて配置作業や取り付けを行うテクニシャンが存在する。このように細分化された専門家により展示環境が作られており、各々の担当者が空間の特徴や光線の取り方、さらには壁面の強度や構造までも把握していると考え

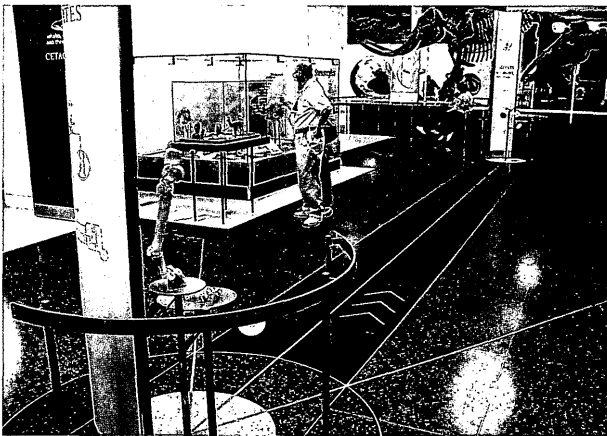
られる。この経験と蓄積が施設運営に大いに活かされていると共に施設内の諸問題に対応していると思われる。また次回の常設展や企画展に応用されて、より来館者にアピール出来る展示環境へと繋がって行くはずである。



メトロポリタン美術館東洋部展示作業 (2003撮影)

ここまで述べて来たメトロポリタン美術館は、美術館の中でも比較的幅広い分野を網羅しているが、やはり芸術系に重きをおいているため展示環境としては限定されている。例えば参加性のある展示や実物以外の情報量が少ないなどである。そのためニューヨーク自然史博物館のデザイン部門にも取材を行い、展示を企画及び制作する環境を視察した。デザイン関連のスタッフ数は、75名という大所帯でデザインのプレジデントをトップにデザイン系ではグラフィック、CG・映像、ライティングの各担当と構造系ではメカニック、造形、ストラクチュアの各担当で構成されている。またオフィス及び制作室は、3フロアに分かれており、1階はプレジデント室、設計部門、CG・映像などの管理部門とオフィス機能を兼ねた作業室。2階は模型やレプリカを制作するスペース及び機材関係が常備されており、原寸大のプリントを出力する機材がある制作室や同じく原寸大の展示パネルなどを作成して見せ方を検討出来るようになっている。さらにライティングの状況などの色や光との関係を検証するスペースもある。3階は木工、塗装など実際に製作するための機材や作業環境が整っており、内部には専門の職人も

在籍しているが、機材をレンタルして外部に製作を依頼することもある。このように非常に恵まれた環境で企画からデザイン、設計及び実寸での検証と製作ができるようになってきている。日常の業務内容は、主にエキジビションの企画立案が多いが、常設展示の改装や改修を段階を踏んで実施している。先のメトロポリタン美術館との大きな違いは、展示品に実物が極端に少なく、展示を実施するために演出計画や模型、映像などによる表現手段を駆使する必要がある。そのため展示デザインやその表現技術に多くを依存することとなる。逆にこの二つのミュージアムに共通しているのは内部組織に専属のデザイン関連の担当者がおり、その経験と知識を最大限に生かせることである。今回取材としては不十分なところが多いと思われるが、それでも展示デザインとそれらの関連の領域はミュージアムにとって生命線であり、欠かすことが出来ない施設の遺伝子のような役目を果たしていることは理解出来た。



ニューヨーク自然史博物館恐竜部門  
(近年部門の常設展示を改装、2003撮影)

## 来館者への関心を高めるために(館独自のデザイン力の確立と人材の育成)

ここまで述べて来た展示に対する取り組みやそのシステムの運営は我国では蓄積するものではなくその場かぎりの効果であり、表層的な体裁を整えるための手段としか捉えられていないと思われる。そのため数年前まで展示デザインやその手法は、雑務

的な業務と位置づけられており、出来れば外注を行い関わりたくないと敬遠されていたのではないだろうか。しかし海外の実績の多い博物館や美術館は、研究業績やマネージメント、管理運営への前向きな取り組みとともにその効果を表現するために、もしくは来館者へのメッセージとして展示環境をうまく使いこなしている。さらに付け加えるとするとキュレーターの研究報告の最大の舞台として考えているのではないか。では来館者の感心を引き付けるための展示とはどのような方策が取られているのか考えてみたい。一つには、興味を抱いて訪れる人の気持ちを裏切らないこと、そのために題材となるテーマを的確に捉えて、そのイメージを伝える手段をみ出すことが重要となる。またさらに感心を高めるためには内容理解を促す解説パネルなどの文章情報の的確で読みやすいリライトの方法によるところが大きい。このことは展示品の見せ方や見る位置にも大きく関わることであるし、このような基本的な箇所にもそれぞれ施設の活動する専門的な人の力量が現れると思う。またこれらの活動を継続するためには施設専属の人材にこそ任せるべきである。このことは前の項目でも述べたようにその館独自の専門性が展示に表現させて行くことが今後の運営には欠かせないことになるはずである。現在この体制を明日にでも実践出来る館は稀であり、今後いかにして館独自の研究テーマに則した展示環境を作り上げて行けるか非常に重要となる。

その担い手として人材の育成を柱とする館の体制作りが急務で有るとともに専門領域内での教育の実践や専門性の確立の推進を行うべきと考える。ここで試案として、これまでの施設内に置かれていた研究職や教育職の他に広報や展示デザインを専門とする部署を創設することを提案したい。これにより保存、収蔵、研究、公開、教育普及のほぼすべてを独自の体制にて運用出来ることとなるわけで、これを持続することが来館者への感心を高めることになると考えたい。それは例えば展示企画の当初から最終の陳列、さらに入場者のデータなどの集計までを一環しておこない、その蓄積を次回に生かす手立てを

考慮出来ることである。このような実績を積み重ねることで館独自の展示環境を作り上げられるわけで、専門の業界がそのことを生み出せるとは思えない。また来館者の目に触れるような活動が研究及び教育の原動力となり、運営全般を活性化させるはずである。その他自ら展示環境の制作に携わっていると自ずと館内を隈無く理解することにつながり、来館者の動向にも大きな関心を持たざるを得ないことになる。このような環境作りと人材の育成が館の活性化に繋がるとともに来館者の関心を得るためへの最大の方策と考える。

## まとめ(博物館、美術館の今後の行方)

ここまで展示空間の成り立ち及びそれらに関わる運営や人材育成の必要性についてまとめてきたが、それぞれの施設の独自性を示しながらなるべく独立した管理運営を成り立たせることが最終目的となる。そのためそれ以外の分野(研究職、教育職など)においてもさらに独自性を打ち出すことを目指した体制作りが急務である。

10年前に行政改革委員会が設置され、3年前に国立博物館、美術館が独立行政法人となって業務を開始するまでの間、各所で議論や検討がされてきたが、現在では地方の公立博物館に波及してきている。さらに一昨年の地方自治法の改正により施行された指定管理者制度<sup>5</sup>による民間事業者の経営代行による参加も視野に入れて今後の博物館の存続を考えなくてはならない。このような切迫した現状を切り開いて、これからも地域に根ざしてゆく手段として施設の独自性をより以上に表出することが解決の糸口と思われる。そのために来館者へのもっとも効果的な接点として展示やその空間環境を捉えて、これまでの研究や財産を表現してゆくことが回答であると考え。またこれらを支えるためにこれまでの人材の再教育と欠けていると考える広報、展示デザイン関連の人材の採用と育成により、施設単独の管理運営を目指すことが必要である。このことが今後の方向性になると確信すると共に、これからもより

議論を深めるよう努めたい。

## 注

- 1 1756年に開催されたロンドン勸業博覧会が世界最初の博覧会とされているが、その後の1798年に開催されたパリ工業博覧会が現在の博覧会の原型とする説もある。
- 2 1798年にフランスで考案された遠近法による演出技法。設定された一つの名所や場面を人型等と背景の絵画をセットし、光学的な演出を加えて観覧する。
- 3 日本で開催された最初の博覧会で、明治4(1871)年に首都としての地位を東京に譲ることになった京都の景気回復等を目的として京都の有力商人が主催した。
- 4 内国勸業博覧会は、それまでの展示の中に含まれていた珍しい動植物や骨董品等を排除して、産業や技術の発展を目的とした国家プロジェクトである。明治10(1877)年に東京にて第1回が開催され、その後京都、大阪と開催されていく。
- 5 平成15年9月に地方自治法の一部改正が行われ、公共施設の管理方法がこれまでの管理委託制度(財団や公社等の公共的な団体に委託先が限定)から指定管理者制度に移行された。これにより民間事業者も対象となり、幅広い能力やノウハウを活用して住民サービスの向上と経費削減を図る。

## 参考文献

- 『博覧会の政治学』吉見俊哉著 中公新書  
 『ディスプレイデザイン』魚成祥一郎監修 鹿島出版  
 『博物館をみせる 人々のための展示プランニング』K.マックリーン著 井島真知+芦谷美奈子訳 玉川大学出版  
 『新しい美術館学 エコ・ミュージエの実際』長谷川栄著 三交社  
 『MAKING THE MUMMIES DANCE Inside the Metropolitan Museum of Art』Thomas Hoving 著 東野雅子訳 白水社  
 『ディスプレイ100年の旅 乃村工藝社100年史』乃村工藝社社史編纂室編集 株式会社乃村工藝社  
 『デパートを発明した夫婦』鹿島茂著 講談社現代新書  
 『ミュージアム・マガジン・ドーム』48号~63号、72号~77号 日本文教出版株式会社

(かどや・おさむ 環境デザイン)

(2004年10月29日受理)